水のゆくえ：アクアカフェ 2010 —— 孔 / 過程 / 物質

Where the Water Flows ? : Aqua-Café 2010 ——Hole / Process / Matter

「アクアカフェ @KCUA Café」は、2010 年夏、京都国立近代美術館にて開催された「Trouble in Paradise / 生存のエシックス」展 (2010 年 7 月 9 日〜 8 月 22 日) を構成する「水のゆくえプロジェクト」の一部である。

美術館の横を流れる琵琶湖疏水は、2010 年に 120 周年を迎えた京都近代化の礎である。「アクアカフェ」は、同じ 2010 年春、高速道路建設のために取り壊された西京区大枝の江戸時代の民家の土塀や壁の土約 12t と、同じく棄却される大原野の竹林の竹や藁を美術館の敷地に運び、疏水の水と練り合わせて、水を飲むための空間を展覧会期中にワーク・イン・プログレスとして構築するものであった。
完成後は、人と水の関係をとらえ直すさまざまなワークショップのプラットホームになり、展覧会終了後は、本体を丁寧に分解して、材料を再利用可能な状態に戻した。

本冊子では、アクアカフェのコンセプトとプロセス、実践を通じて得たいくつかの考察を記す。

"@KCUA Café" is a part of art project "Where the Water Flows?" which is one of 12 projects of the exhibition "Trouble in Paradise / Medi(t)ation of Survival" organized by the National Museum of Modern Art, Kyoto, in summer 2010.

The Lake Biwa Canal, which was constructed 120 years ago, is the cornerstone of the modernization of Kyoto City. Meanwhile, today, in the western end of Kyoto, many old houses and bamboo forests are being destroyed to make way for freeway construction.

'Aqua-Café' project was to build a temporay space for drinking water in front of the National Museum of Modern Art alongside the Canal, using the water from the Canal and approximately 12 tons of Edo-period earth of an old house with several dozen bamboos which were carried from the western end of Kyoto-city.

目　次

2　水のゆくえ：アクアカフェから原野へ

4　岡崎チャンネル

6　構想と図面：モデルとしての第一竪坑

8　素材の循環と再生：土／竹／藁／水

10　制作プロセス

14　アクアカフェの 5 日間

19　解体

20　英文概要

Table of contents

2　From Aqua-Café to an unexplored field

4　Okazaki Channel

6　Concept and Plan : The First Pit Shaft as model

8　Regeneration and circulation of materials

10　Working process

14　5 days of Aqua-Café

19　Decomposition

20　Where the water flows

WELCOME
@KCIA
Café
Fresh Water
from the Can
TODAY'S MENU

concept map_1 of @KCUA-Cafe

水のゆくえ：アクアカフェから原野へ

土は水によってかたちをなし、人は水によっていのちをつむぐ。

ひとが大地に住まうために最初に必要とされるのは、古来、水の制御であった。ひとは水が手に届く範囲に生き、文明は河のほとりで生まれ、水の流れるみちと、ひとやものが移動するみちが、むらやまちを形成した。水の勢いをなんとか制御し、生存の基盤が形成されると、ひとはその風土での自然との関係を表象する「にわ」をつくり、文字通り「文化＝耕されたところ cult-ure」を生み出した。

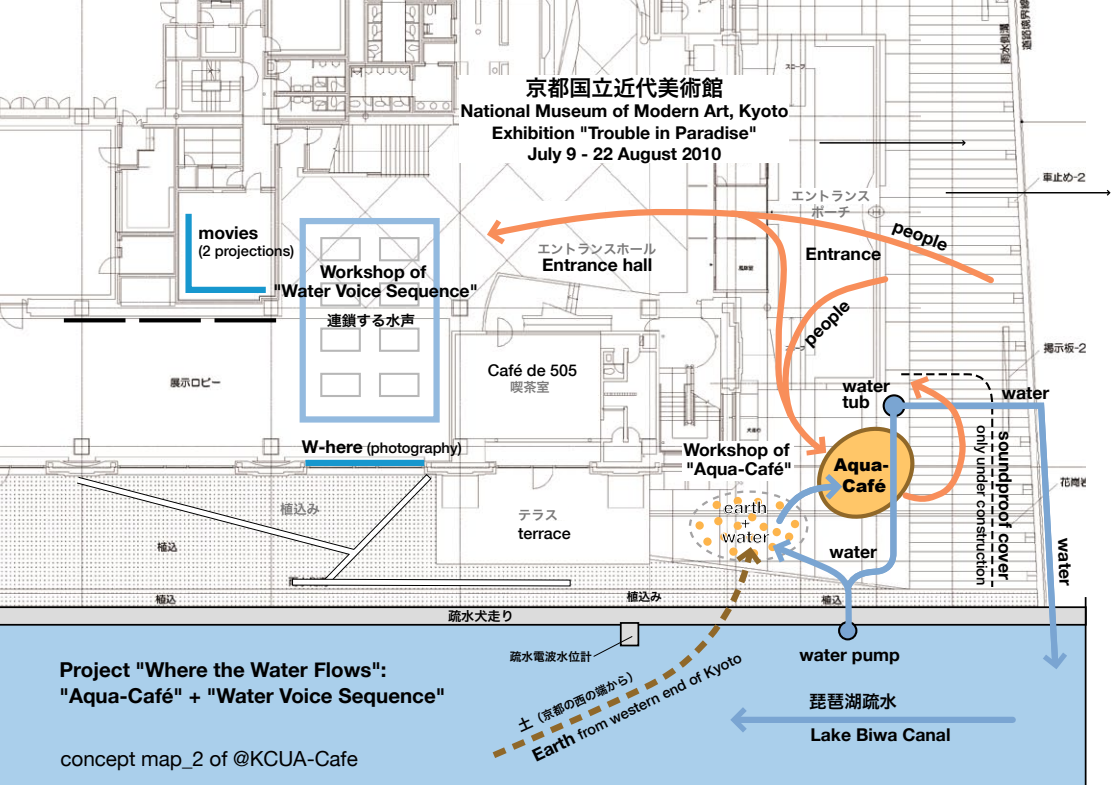
京のみやこも例外ではない。

京都の東端、美術館の横を流れる琵琶湖疏水は、京都が近代都市へと脱皮する礎であった。全長 8.7km の第一疏水は、土木用重機などない時代に、人力で大地を掘り削ってつくられた。明治 23(1890) 年に完成した疏水は、発電、舟運、飲料・防火・工業用の水をみやこにもたらした。大津市三保ノ関の取水口から流れてきた琵琶湖の水は、やがて、みやこの東の僻地にすぎなかった岡崎の地に、壮麗な別荘庭園群を生み出した。今も市民生活の基盤を支える琵琶湖疏水は、今年、完成 120 周年を迎える。

他方、京都の西端、静かな里山の風景の残る大枝・大原野地域では、現在、水ではなく、車が流れる高速道路建設のために、多くの民家や竹林、柿畑が次々と取り壊され、風景の大きな改変が進行している。そのなかには、この地が開拓された元禄～享保の頃から存続してきた民家もあった。つくられた当時の姿をそのままとどめる土塀や門屋の壁は、300 年近く前に近隣の山野からとられた土でできていた。

「水のゆくえ / アクアカフェ」は、この京の西の端の民家解体現場から江戸時代の土くれ約 12t を救い出し、東の端の岡崎の地に運んで琵琶湖疏水の水と捏ね合わせ、ひとと水の関わりを問い直す空間をつくるプロジェクトである。そこには、同じくつぶされる大原野の竹林から取った竹数十本、同地の田で集めたワラ数十束、そしてさまざまな人の手と身体が参入する。

土は、焼成したりしないかぎり、ほぼ無限に再生利用できる素材である。それは、水とともに、ひとの歴史的時間を越えて偏在する世界の元素（エレメン）であり、建築から化粧（マチエール）にいたる人類のあらゆる造形活動の最古の原素材であ



る。かつてひとは、身の回りの土を使って住まいをかたちづくり、壊れてもまた土を再利用して新たな住まいへと転生させた。土は、市場で購入したりする必要のない一種のオープン・ソースであり、それらを使って自らの生きる環境を形成することは、オープン・テクノロジーとしてそれぞれの地域で世代を通じて共有されていた。

水についていえば、水道が普及する以前、あるいは水道がない地域で、ひとは川や泉、あるいは地下の水源から、さまざまな道具と身体技術を駆使して水を入手し、運び、利用したし、今も世界各地でそうした営為が続いている。だが現実には、この水の惑星全体の水約 14 億 km^3 のうち、人が生活に利用できる水は 0.01% 程度にすぎず、世界の 9 億人近くが安全な水を飲めないでいる。アフガニスタンで井戸や用水路の建設を行っている医師の中村哲氏は、清潔で安全な水を確保することが何よりの医療行為であると説く。上下水道というインフラの整った社会に生きるわれわれは、蛇口をひねれば水が出ることを当然と思っており、生存の基盤を支える治水事業が命がけの営為であることも忘れている。琵琶湖疏水の工事の犠牲者は、弔魂碑に刻まれた 17 名にとどまらない。

アクアカフェは、そうした忘却に抗して、われわれの生存を支える水がどこから来て、どこへ行くのかをたずね直す試みである。と同時に、資本主義市場と専門技術の占有体制の手前で、地上に生きるひとびとが共有しうるオープン・ソースやオープン・テクノロジーへのアクセスをはかる試みでもある。

実際、われわれは、地域の人々との交流や労働のなかで、土・竹・藁などの主な自然素材のすべてを無償で入手できた。だがそれは、素材を再私有化したり、専門技術を軽視することではない。逆に、素材と技術に内在する理 (ことわり) を身体的に学び直し、それらを生存の作法として、人と人、人と自然のつながりや循環のなかに置き戻すためである。ひとが生きるための素材と技術は、与え / 与えられるという、金銭に還元されない悦びとともにもっと交換・共有されていい。

疏水沿いの古い土の空間で飲むいっぱいの水は、価値の源泉を問い直すための「原野」へと、われわれを誘い出してくれないだろうか。（井上明彦）

＊『Trouble in Paradise / 生存のエシックス』展 ワークブック（京都国立近代美術館編、2010）所収

明治 26(1893) 年 9 月 3 日、内国勧業博覧会のための紀念殿地鎮祭のときの情景。今の平安神宮大鳥居の位置に張りぼての鳥居、手前に疏水と水辺で憩う人々、疏水の向こう岸に仮設の茶店が見える。「アクアカフェ」は仮設の茶店とほぼ同じ場所 (A) につくられる。(写真提供：平安神宮)

岡崎チャンネル　Okazaki Channel

芸術と生命・医療・環境領域の交通を問う『Trouble in Paradise / 生存のエシックス』展は、美術館の内側に限定された従来型の「美術展」ではなく、美術館の立地する岡崎というサイトへも射程を広げるものだった。

岡崎という土地の歴史性や地理的・生態学的特性を取り込むこと。それは同時に、この展覧会が「京都芸大創立 130 年記念事業協賛」であり、京都という都市の近代化とパラレルな 130 年という歴史的時間を考慮に入れることでもあった。

いみじくも 2010 年は、京都近代化の起動力となった琵琶湖疏水の竣工 120 周年でもあった。琵琶湖疏水の完成とそれに続く内国勧業博覧会の開催（明治 26 ＝ 1893 年）は、人家も疎らな僻地にすぎなかった岡崎の地を、京都近代化のシンボリック・ゾーンに変えた。南禅寺近辺には、庭師・植治によって疏水の水を引き込んだ壮麗な別荘庭園群が次々とつくられ、岡崎は美術館や文化会館、動物園が集まる観光風致地区となっていった。

風景とは絶対的に定まったものではない。美術館の立地する岡崎という土地もまた、大地のうえに歴史や文化が折り重なった重層的な場所である。いわゆる「土地の特性 site specificity」とは、固定的なものではない。数百年、数千年、数万年の時間軸で見れば、土地はアイデンティティなど持たない。

今ある土地の風景から、歴史や文化のレイヤーをはがして、「原野」の状態を想像すること。「アクアカフェ」が建てられるべきなのは、その「原野」、名もなき大地の上であるだろう。

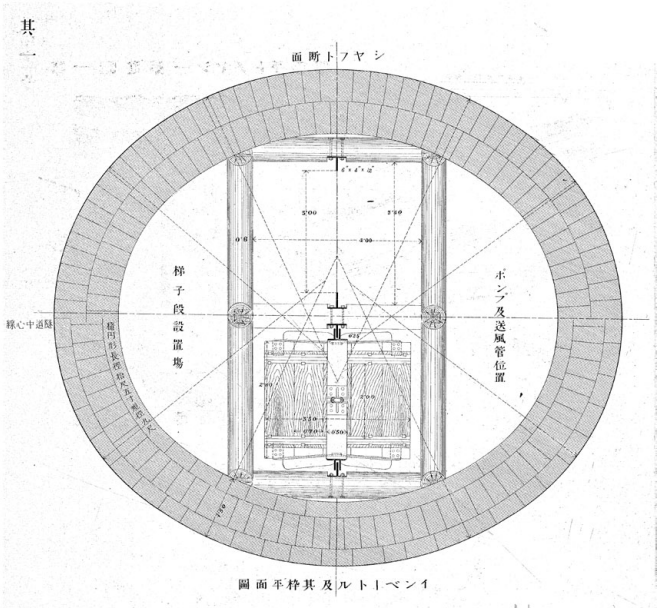
こうしたコンセプトは、疏水フィールドワークを通しての地形や水流の身体的経験によって促進・補強された。

疏水南禅寺舟溜り　停水時の水流　2010/1/6

琵琶湖疏水第１トンネル内より、第１竪坑を見上げる。Ｒをつけた煉瓦の手積みが，美しいゆらぎのある曲面をかたちづくっている。撮影 2010/2/19

疏水第１トンネルのフィールドワーク。生存のエシックス・チームによる疏水フィールドワークは、2010/1/6･8、2/19、3/16 の３回行った。

琵琶湖疏水扁額案内板地図部分（京都市上下水道局、デザイン：井上明彦 2010 年）



田邊朔郎「第一竪坑図面」『琵琶湖疏水工事図譜』(明治 18) より（図版提供：琵琶湖疏水記念館）

モデルとしての第一竪坑

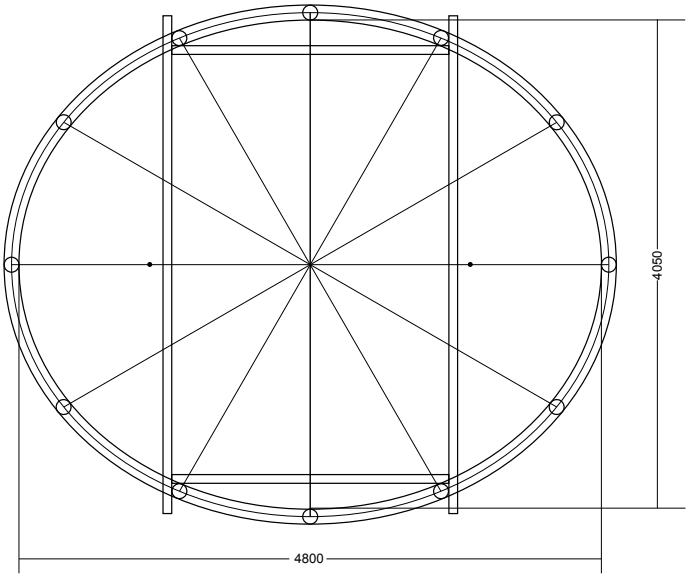
アクアカフェの正楕円形の平面は、琵琶湖疏水第一竪坑をモデルにしている。スケールは、竪坑断面 (3.2x2.7m) の 1.5 倍に設定した。

第一竪坑は、1885(明治 18) 年 8 月 6 日に着工した疏水工事の最重要な起点である。当時日本最長の 2436m の第一トンネルを掘るために、疏水設計者の田邊朔郎が、トンネル軸上に垂直に穴を掘り、そこから両方向に掘っていくシャフト方式を採用した。日本初の竪坑だった。

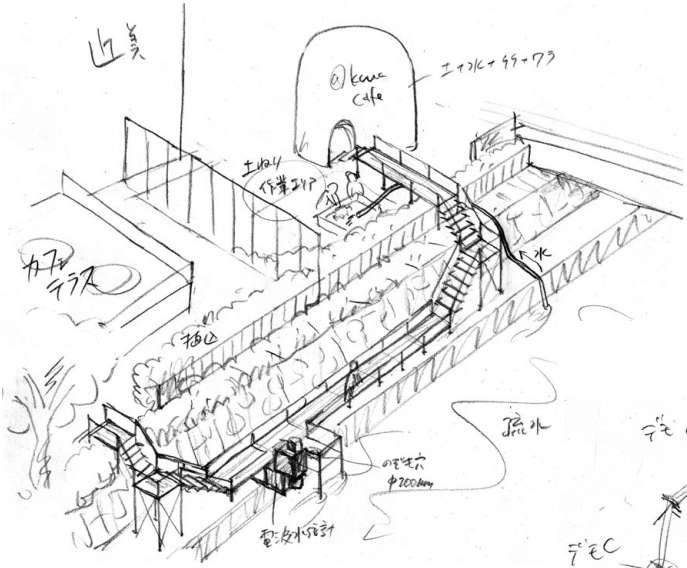
現在のような重機のない時代に、深さ約 47m の竪穴を人力で掘る。それは、疏水工事で最多の犠牲者を出した難工事になった。だがこの第一竪坑がなければ、第一トンネル開通は困難であり、したがって琵琶湖疏水そのものも不可能だっただろう。第一竪坑は、多くの命と引き換えに、琵琶湖疏水と共に始まる京都近代化を生み出した産道ともいえる。

水の行方を問うアクアカフェのモデルとして、これ以上のものはなかった。アクアカフェを建てるとは、この垂直の孔を近代美術館の前にうがつことでもあった。

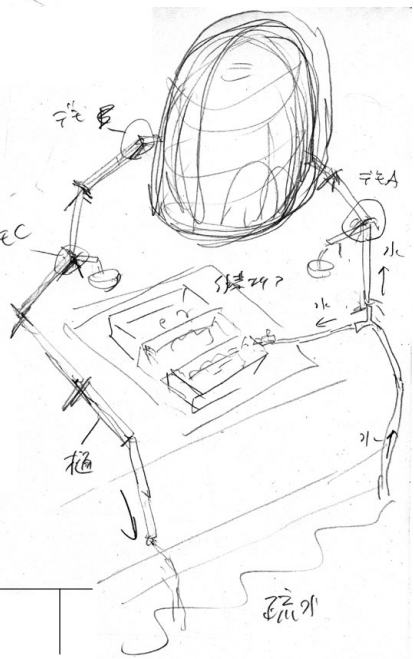
第一竪坑。大津と山科を結ぶ小関越え沿いにある。貴重な文化遺産だが、崩落の危険があるため、現在一般公開されていない。



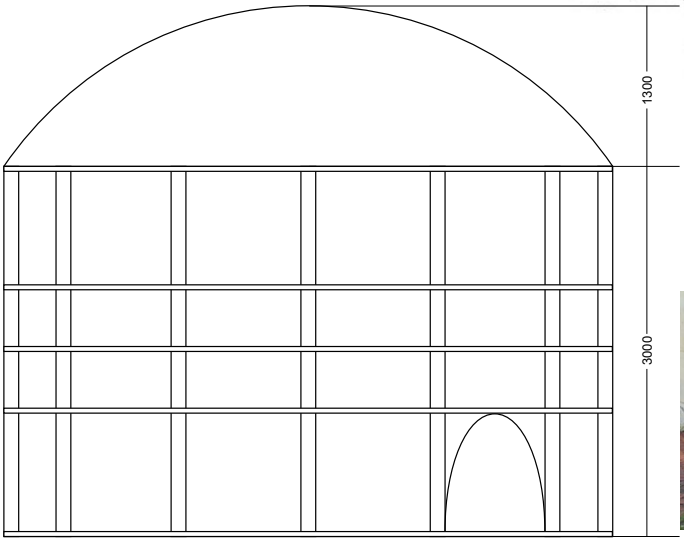
アクアカフェ平面図（左頁）
同　立面図（右頁）



イメージスケッチその１：京都国立近代美術館および京都市上下水道局疏水事務所にと京都市都市計画局風致保全課に提出。当初、アクアカフェは、疏水の新たな身体的経験を促す仮設遊歩道とつなげて構想されたが、費用および美術館管理の見地から遊歩道案は廃案となった。



イメージスケッチその３：遊歩道案に代わる循環水路設置案。疏水の水を引き入れ、循環させて、ふたたび疏水に戻す仕組みは、植治による岡崎庭園群のデザインを参照している。



竹で屋根のアーチと壁高を検討する。

素材の循環と再生：土／竹／藁／水

アクアカフェ・プロジェクトにおいて、設計・制作と並んで重要だったのが、材料の調達、その循環と再生である。

(1) 用いる材料は、基本的に自然素材であること。
(2) 主材料となる土、竹、藁、水は買わずに無償で調達すること。
(3) 材料は、制作中・撤収後もいっさい捨てることなくすべて回収し、再利用可能な状態に戻すこと。

これらは、市場経済に依存した造形芸術への抵抗であるとともに、地域における人 - 物 - 自然の新たなネットワークの形成のなかに、材料や技術を含めた造形活動の条件と目的を再配置する可能性を探る試みでもあった。

九社神社の参道入口にあった昔日の大藪家土塀。西京区大枝西長町。

土救出呼びかけポスター。実際の作業は 5/11 ～ 29。

土塀をゆっくり引き倒して土を救出する。2010/5/27

土

アクアカフェの主材料の土は、京都・西山のふもとにある大藪農園の土塀の土である。練り土積みでできた土塀は、長さ 15 m・厚さ 30cm ほどあった。
江戸時代から 300 年近く続く大藪家は、京都第二外環状道路の建設のため、2010 年春に取壊しを余儀なくされていた。
同年 5 月、解体の始まった大藪家から、土塀、屋根、壁の土を救出する作業を行った。大藪家、地元の松尾工務所、解体を請け負う吉井工務店の協力を得て、京都芸大学生たちとともに、10 トン強の土を土嚢約 400 袋に集めることができた。

練り土積みでできた土塀からは、江戸期につくられたままの土塊をとり出せた。

5/29　土嚢約 400 袋と竹を美術館に搬送

竹　竹も、道路工事でこわされる大原野の竹林から、約 80 本を無償で調達した。

藁　土に混ぜる藁は、前年秋、大原野の大工兼農家の好意で、収穫の終わった田から集めることができた。

水　アクアカフェは、江戸時代の土と明治期にできた琵琶湖疏水の水をこねてつくられる。それは、土と水という二つの根本物質、京都の西端と東端、江戸時代と近代の交差するところに立ち現れ、価値の起源について問いかけるものであらねばならない。そのためには有償の水道水ではなく、無限に使えるおびただしい量の水がどうしても必要だった。さいわい疏水事務所の特別のはからいで、美術館脇の疏水から水を汲み上げ、作業現場に循環させて、また疏水に戻すことが可能になった。

近代美術館宛・防音シート設置許可依頼（2010/6/1）

近代美術館学芸課　河本様　牧口様

前庭での作業中のことですが、夜間の接近を阻む目隠しとして、竹塀の案を出しましたが、あとでお見せした解体業者の防音シートを使ってはいけないでしょうか？

"夢中です。"の文字が逆さになって林立し、冒頭の文字が消えているものです。

ちょうど土を集めた江戸期の民家解体工事現場にあったもので、美術館の前だとさまざまな寓意とメタファーが発生します。文化財と廃棄物、破壊と創造の相同性も喚起されます。ただあまりにもきたないレディメイドなので、反発も大きい気がします。しかし私は、今回の展覧会はそういう踏み込みも必要な気がします。

可能性があるなら、動いてみようと思います。借りれないかもしれません。借りれても、建築作業が済んだらはずします。

ご意見くださるようお願いいたします。

井上明彦

大藪家解体現場を逆さ文字で覆っていた防音シートを、吉井工務店から無償で借り受ける。

防音シートを近代美術館前庭の現場に張り巡らす。解体現場と同様に「夢中です」の文字を倒立させる。ピティ足場設置協力：吉井工務店

制作プロセス

基本構造

6／30～7／30

基本的に現場での直接制作であり、あらかじめ構造の細部が決まっていたわけではない。そもそも撤去前の廃竹林から集めた太さも厚みもまちまちな竹で正確な設計図面を引くことは不可能だった。強度とバランスをからだで確かめながら、試行錯誤で作業を進めた。それは建築の発生をたどり直すような、原始的な空間造形といえた。

7 月 1 日 (木) 作業開始。UV シート（7.2mx9.0m）を美術館前庭の石貼り床面に敷き、480x405cm の正楕円を描く。シートは実寸大の平面図であると同時に汚れ防止用でもある。
12 本の竹柱は太さも厚さもまちまち、床面にはアンカーも打てない。
割り竹を胴巻きにして、角材とワイヤーで楕円柱のかたちを保ち、さらに柱間に筋交いを入れて補強。にじり口のような小さな入口は、この筋交いによって決まった。

骨組みが安定したら、2~3cm 幅に細く割った竹を外側から小舞風につけていく。（右写真は 7 月 8 日の展覧会内覧日の状態）
まだ軽いので、強風であおられ数メートル動いたことがあった。
梅雨時で雨が多く、作業がしばしば滞る。

割り竹を重ね合わせ、柱上端に差し込んで屋根のシェル構造をつくる（長谷川直人・陶磁器専攻教授。アクアカフェは、適確な技術をもった氏の協力がなければできなかった)。
トラックで運べた最長の竹が 6m。これが楕円の長軸 4.8m に対するアーチの曲率を決めた。

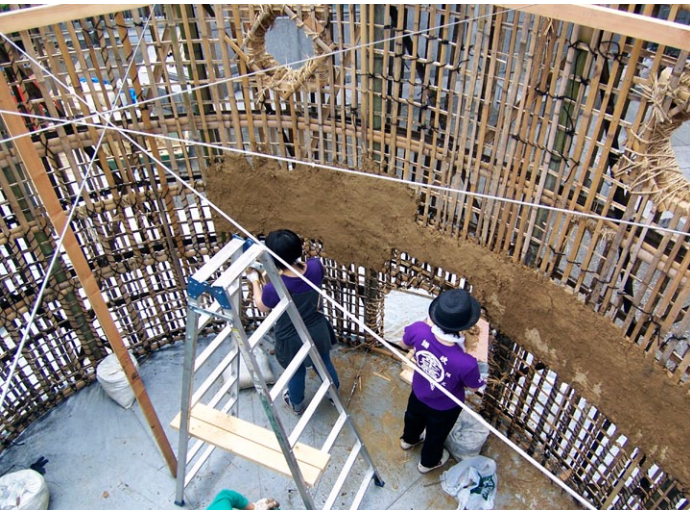
窓の方向に留意して、6 つの窓枠をつける。

制作プロセス

内壁

7／30～8／4

土塗りは７月 30 日からようやく着手した。
土の再生は、土塀の土塊を砕くことから始まる。
再生された古い土塀の土は、藁などの繊維分が分解していて、
ひじょうに粘り気が強く、乾燥すると硬く固まった。



壁の構造は、柱の厚みを介して外と内双方に竹小舞をはり、
壁厚をかせぐと同時に中空で土を乾かす独自の「二重竹小舞」方式を採用した。
土落ちを防ぐため、当初は竹小舞にシュロ縄を巻いたが、
途中から竹の端材を再利用して、隙間を細かくするやり方に切り替えた。

竹小舞に土を手で塗り込んでいく。

外側から見た塗り土の状態。

二重竹小舞の中空部分。

8月3日、構造が安定したのを受けて、道路際に建てていた防音シートを撤去し、作業をむき出しにした。
炎天下、土の乾燥は早く、作業ピッチがあがった。
岡崎という、京都随一の風致地区での土塗り作業には、通りすがりの観光客から左官職人、大工、美術家、外国人建築家、子供たちまで、さまざまな人が飛び入りで参加し、文化や職業の違いを越えた知見の交換が発生した。
その無国籍でアナーキーな交流の時空は、このプロジェクトの目的のひとつでもあった。

また、「水のゆくえ」プロジェクトをともに進める中ハシ克シゲ氏と、7月30日藤森照信氏講演会「土と建築」、8月8日中村哲医師講演会、8月9日下水道見学会を開催した。

制作プロセス 外壁 8/5〜8/12

こねる、塗る、洗う…作業はつねに水とともにあった。

なまの土を素材とする造形活動はゴミを出さない。落ちた土もまわりの埃も一緒に吸収して、アクアカフェはできあがっていく。土の無限の循環性においては、創造と破壊、生成と崩壊の二項対立は無意味だ。破壊や崩壊は、次の創造のための素材の生成でもある。

8月12日、台風による豪雨で前日に土塗りした部分が崩落した。だが土は練れば何度でも再生でき、修復はたやすい。荒れた土肌や崩落部分の一部もあえてそのまま残した。

制作プロセス 屋根 8/10〜8/16

屋根の制作にあたっては、まず柱間を三等分して平行に竹でアーチをつくり、さらに細竹を加えて交点を縄で結びつけていくことで、シェル構造を強化した。
次にその上をラス網で覆う。身を乗り出して土塗りをするため、竹の間隔は人のからだが入れるように決める。ラス網も土塗りと平行して慎重に張っていく。

素手で塗りのばすため、土はゆるめにこねる。結果的に屋根に塗った土は土嚢 40 数袋、1 トン近くに達した。

撮影：中島彩

内側から見える土の生物的なテクスチュア

炎天下で屋根に土を塗っていて、あらためて気づいたことがある。屋根は人間的空間の上限だという当たり前の事実である。屋根の上には人間にはどうしようもない天が広がっている。アクアカフェが、人間を越えた物質や自然との身体的対話であることを、屋根の生成とともにあらためて実感できた。

屋根にはたくさんの小さな穴が自然と塗り残された。全部埋めることは無意味だった。残された穴は、作業の息吹をとどめ、小さな光のしずくを暗い室内にこぼしてくれる。
120 年前の第一竪坑掘削のとき、深い穴の底からどんな光が見えただろうか。

アクアカフェの５日間

5 days of Aqua-Café

August 18-22, 2010

来場者は、災害用備蓄飲料水「疏水物語」を特製の「水の器」で無償で飲むことができる（京都市上下水道局提供）。
入口横の看板の「本日のメニュー欄」には、その日に行う水のデモンストレーションを記した。例：「水遊び」「水鏡」「洗濯」「お茶会」「解体」など…

平面は、長軸 4800mm・短軸 4050mm の正楕円。壁高 3000mm、天井最高点 4400mm。
ふたつのアーチ型のにじり口は、高さ 950mm・幅 900mm、北西と南東に開く。
内径約 300mm の 6 つの窓が等間隔に空間を取り巻く。
竹筒が空間を斜めに横断し、疏水から引き入れた水がたえず流れる。
中心に長軸 1200mm・短軸 800mm、厚み 12mm の正楕円のガラステーブル。
その上に陶磁器専攻の学生たちがつくった「水の器」群。
まわりに窓と同数の 6 つの丸い座イスを置き、床にはバラスを敷き詰めた。
空間の中心には、作業中に土の中から偶然見つかった「寛永通宝」が吊るされた。

日中は、塗り残した屋根の小さな穴から、光のしずくが降ってくる。

土の中から出てきた寛永通宝は、元の土塀が江戸期に作られた証し。

室内に草が芽ぶいた。種が土の中で眠っていたと思われる。8/21

長谷川直人『ただそこにあるもの』陶作品

つちのいえ茶会　席主：前田剛志（生存のエシックス「水のゆくえ」「光・音・脳」プロジェクトメンバー）　8 月 22 日 (日)15 時〜

疏水から引き上げた水が、竹筒を通ってアクアカフェを貫き、朱塗りの鉄桶に流れ落ち、美術館の庭にあふれ出て、また疏水に戻っていく。

ふんだんな光と水は、人のさまざまな行為を誘発する。

水のさまざまな効果をテーマにしたアクアカフェの実演メニューの一つ、「洗濯」。「洗う」ことは、人・物・場所を浄化し、再生させる。

自転車搭載型緊急用浄水装置「シクロクリーン」（開発：日本ベーシック）で、アクアカフェを貫通してきた疏水の水を浄化し、食器を洗う。

8／24〜8／28 解体

展覧会終了後、8月24日から29日まで、アクアカフェの解体・撤去を行った。この作業は、材料調達・制作・展示と同等の重要さをもっていた。なぜなら、アクアカフェは、それ自体がいわゆる「作品」なのではなく、土の再生と循環のひとつのプロセスの提示にほかならないからだ。
材料を再利用するには、解体を制作の逆プロセスとしてとらえ、構造の分解と材料の分離を注意深く行っていかねばならない。
1）まず、床のパラスを運び出す。
2）きれいにした内側に向かって、屋根の土を落とす。
3）壁の土を内側に突き落とす。
4）土をすべて土嚢におさめる。
5）竹小舞の竹を一本ずつはずす。
6）構造をほどいて、分解してまとめる。

さいわい作業は5日間で終えることができ、9月1日にはすべての材料を芸大に持ち帰り、敷地を洗浄して元通りにした。

素材とかたち――アリストテレス的にいえば、質料（ヒュレー）は、形相（エイドス）と結びついてしかじかのかたちをもつ現実態（エネルゲイヤ）となる。壊れるのはつねにこの現実態、すなわち質料と結びついた形相であって、かたちなき受動的存在としての質料は壊れない。解体とはかたちを壊すことだが、それは同時に、土という質料を人間の手になる形相から解放し、ふたたび可能態（デュナミス）に戻すことなのだ。

形相の側、かたちを与える人間の側からではなく、質料の側から存在と世界を見ること。それは、われわれの文明を支配する人間中心主義を脱して、自然と物質の側から芸術と人間の限界をみきわめ、万物を生々流転する可能態の相において見ることであるだろう。

Where the water flows : Aqua-Café

Aqua-Café as vessel of natural light

Aqua-Café was one of the 12 art projects in the exhibition “Trouble in Paradise/Medi(t)ation of Survival” which was organized in 2010 by The National Museum of Modern Art, Kyoto.

In 2010, Lake Biwa Canal, running just beside MoMAK, reached its 120th anniversary. As the first large public engineering work in Japan, it was built in order to reconstruct Kyoto, which had declined after the Meiji Restoration. The canal generated electric power, ways of transporting goods, rice, charcoal or wood, and changed the eastern provincial area into a cultural park.
Now, at the western end of the City of Kyoto, Oe area where KCUA is located, the construction of the freeway has destroyed many traditional houses and bamboo forests.

To reconsider the modernity of Kyoto from the viewpoint of water, Aqua-Café was built by mixing the water from the canal and 12 tones of earth from Oe area with bamboos to create a temporary space for drinking water in front of MoMAK.

The ellipse plan came from the First Pit Shaft of Lake Biwa Canal, which was built by manual excavation to a depth of about 47 meters 125 years ago for making the first tunnel of the Canal. Many workers died from the hard labor of digging.

In Aqua-Café project, being independent of the market economy and getting materials without purchasing them were so much important as making the art work itself. Today, in art as well as in architecture, we use materials bought at the market. All those materials are industrial products. As Marcel Duchamp said, all the art works in the modern capitalist society are "ready-made" consisting of industrial products.

Against this current trends, our approach consists of :
1_using natural material in principle, such as earth, bamboo, straw and water,
2_getting materials directly from the regional environment without purchasing them,
3_reusing the materials after removal for another work or project.

This project would not have been realized without new relationships among various domains in the society, for example, local residents, carpenters, traditional plasterers, construction companies and Kyoto City Waterworks Bureau. In other words, Aqua-Café was a trial to create an alternative configuration of values and conditions of artistic activity, including materials and techniques.
After the exhibition, the body is decomposed and the materials of earth and bamboos are brought back and reused.

This project also refers to the reconsideration of the relationship between material and form. According to Aristotle, hyle (material or matter) is a potential and passive element which comes into being as energeia (actual thing) with a given eidos (form). But hyle remains constant throughout the process of change. It is dunamis (potentiality) inherent to everything.

We destroy the form of an actual thing, for example, the form of Aqua-Café, but not the material. In other words, through destruction, hyle is liberated from the eidos (form) forced by human beings and turns back to the state of dunamis.

We human beings tend to see the world from the viewpoint of the form which we pressed upon the material. This is dualism of creation and destruction, which is connected with anthropocentrism. But if we see the world from the viewpoint of hyle (material or matter), all things are dunamis (potential beings) in the state of flux without end.

Aqua-Café is neither an "art work" nor an "end”, but simply is a temporary form or a network of relations which the primary material (hyle)—earth and water—takes in the process of constant change.

謝　辞　Acknowledgement

『水のゆくえ：アクアカフェ』実現にあたってご協力いただいた方々に深く感謝します。
(順不同・敬称略・肩書きは 2010 年当時)

京都国立近代美術館
京都市上下水道局 疏水事務所
独立行政法人 日本学術振興会
国立民族学博物館
京都府立総合資料館
平安神宮
大藪農園
創作建築工房大五
(株) 松尾工務所
(株) 吉井工務店
日本ベーシック (株)
岡本繁樹 (京都市上下水道局下水道建設部)
松下輝孝 (松下左官店)
内池軍次 (建築物設備管理コンサルタント)
cafe de 505
大枝アートプロジェクト実行委員会

制作協力 :
長谷川直人 (京都市立芸術大学教授・陶磁器)
中ハシ克シゲ (京都市立芸術大学教授・彫刻)
松井紫朗 (京都市立芸術大学准教授・彫刻)
前田剛志 (同志社女子大学講師・メディアアート)
京都市立芸術大学陶磁器研究室
秋山 陽 (京都市立芸術大学教授・陶磁器)
重松あゆみ (京都市立芸術大学准教授・陶磁器)
森野彰人 (京都市立芸術大学講師・陶磁器)
栗本夏樹 (京都市立芸術大学准教授・漆工)
藤野靖子 (京都市立芸術大学准教授・染織)
椎原 保 (京都市立芸術大学講師・構想設計)
穴風光恵 (成安造形大学情報メディアセンター)
小中行雄 (「水のゆくえ : 連鎖する水声」ボランティア)
中野宗和 (同上)
小石原剛 (美術家)
堀 香子 (陶芸作家)
後藤さん (彫刻家)
弓桁信彦 (工務店勤務)
三角真一 (野良人間)
高木舞人 (株式会社ダン計画研究所)
井上萌子 (デザイナー)
小林可奈 (デザイナー)
西尾真由子 (大阪大学大学院生)
嶋田康佑 (京都市立芸術大学 OB)
山口哲史 (同上)
堀内 航 (同上)
中島 彩 (京都市立芸術大学大学院生)
土橋 藍 (同上)
村田ちひろ (同上)
富元秀俊 (同上)
日下知恵子 (京都市立芸術大学学生)
熊谷正芳 (同上)
木下愛理 (同上)
前田菜月 (同上)
中西瑞季 (同上)
奥村 彩 (同上)
谷口 悠 (同上)
稲垣若菜 (同上)
村上直樹 (同上)
森井綾乃 (同上)
延命光希 (同上)
九鬼みずほ (同上)
寺本美波 (同上)
南 大樹 (同上)
小林まり絵 (同上)
村里愛美 (同上)
森田彩加 (同上)
一柳瑞穂 (同上)
藤村佳朋 (同上)
門田 元 (専門学校生)
福岡直人 (小学生)
長谷川彌 (同上)
森野隼次 (同上)
金沢倫太郎 (同上)
椎原一景 (同上)
椎原葉子 (同上)
小森ひかる (同上)
ほか飛び入りで参加下さった方々

撮影協力 : 四方邦熙（p.1, 14, 17）

＊本記録集の作成は、文部科学省科学研究費助成基盤研究 C「土による環境造形とサスティナブル・デザインの可能性」（平成 22-24 年度、課題番号 22615040）による。

『水のゆくえ：アクアカフェ 2010 —— 孔／過程／物質』

撮影・編集・デザイン：井上明彦
印刷：(株) グラフィック
発行：2012 年 3 月 31 日

"Where the Water Flows ? : Aqua-Café 2010 —Hole / Process / Matter"

editorial design : INOUE Akihiko
printing : Gr@phic
publishing : March 31, 2012

© INOUE Akihiko 2012